

## 別紙 4

報告番 -	※ -	第
----------	--------	---

## 主 論 文 の 要 旨

論文題目  
氏 名

大学生のメンタルヘルス問題発生メカニズムに關与する共感—システム化の構造と機能の検討

桃木 芳枝

## 論 文 内 容 の 要 旨

青年期後期にあたる大学生にとって、この時期は新たな自己を形成していく過程にあり(Choudhury, Blakemore & Charman, 2006)、自己との葛藤、対人関係や異性問題、将来の職業選択など多くの悩みを抱えており(杉村, 2001)、これらが原因で心身の健康を害することも多い。また、対人関係や学業などの日常生活で生じる様々なストレスが生活面での不適応を引き起こし、その不適応が原因で心身症傾向、うつ傾向および不安傾向などを誘発する(Schönfeld, Brailovskaia, Bieda, Zhang & Margraf, 2016)。さらに、この時期は精神疾患の好発症年齢域(18-24 歳)にある(Kessler, Berglund, Demler, Jin, Merikangas & Walters, 2005; Hunt & Eisenberg, 2010)。よって、生活面での不適応が原因で誘発されるメンタルヘルス上の問題発生メカニズムを明らかにすることは精神疾患の早期発見にもつながる重要な課題と考えられる。

メンタルヘルスの問題を引き起こす要因の一つとして、思考形式などの認知スタイルの重要性が指摘されている(Calmes & Robert, 2007 ; Kertz, Koran, Stevens & Björgevinnsson, 2015)。たとえば、心配および反復思考の不安症状に対する影響(Calmes & Robert, 2007)、ネガティブな反復思考の抑うつと不安症状に対する影響(Kertz et al., 2015)などが報告されている。さらに、コーピングと Baron-Cohen(2002)の共感との関連が心理的苦痛に及ぼす影響について、低い共感が高い心理的苦痛と関係することも明らかにされている(Noda, Takahashi & Murai, 2018)。これらのことから、メンタルヘルス上の問題を引き起こす要因としての個人のもつ思考や行動、他者への共感の欠如などは認知スタイルが大きく影響している可能性があると考えられる。認知スタイルとは、生来個人に備わっている無意識的な特質であり、外界の情報をど

のように取り入れ、処理し、判断するかという認知活動の様式にみられる個人のタイプをいい、この認知活動の様式は個々人で時間的に比較的安定しているといわれる(Riding & Rayner, 1998)。本研究では、なかでも人間の基本的な認知スタイルとして提案されている Baron-Cohen(2002)の共感—システム化に着目する。

人間の因果的認知には、欲求や感情・意図などの心的状態の因果関係を認知する心的認知と、物理的な世界の因果関係を認知する物的認知が認められている(Cosmides & Tooby, 1994)。この理論に基づき Baron-Cohen(2002)は、心的認知を共感、物的認知をシステム化とした。共感とは、他者が何を感じ、何を考えているかを知り、それに反応して適切な感情を催すことをいい、システム化は対象物のメカニズムやシステムを分析し、規則性を解明する働きをいう。共感とシステム化は各々独立した因子(若林他, 2006)で、これら二つの因子から個人の因果的認知の全体像を理解しようとするものである。そこで、本論文の目的は、大学生の「共感—システム化」という認知スタイルの構造と機能を明らかにし、共感—システム化を指標として、メンタルヘルスの問題発生メカニズムを解明することを試みるものである。

本論文は、6つの章で構成されている。

第1章では、研究の背景と本論の目的について述べた。

第2章では、Baron-Cohenの共感—システム化について詳述した。

第3章から第5章では、本研究で行った4つの研究を扱った。4つの研究の概要は次の通りである。まず、先行研究において明確にされていない、共感およびシステム化の下因子構造を明らかにし(研究I-1)、ついで、共感—システム化の機能について検討した(研究I-2 および研究II)。そして、Lazarus & Folkman(1984)の心理的ストレスモデルに基づいて考案された加藤(2001)のモデルを参考にして、対人ストレスを負荷したモデルを構築し、共感—システム化の機能を検証した(研究-III)。

以下、各研究で得られた示唆について述べる。

研究I-1(第3章1節)では、共感—システム化の下因子構造は、大学生を対象に質問紙法によって得られた有効回答(981名分)について探索的因子分析を行った。共感からは、「共感的気づき」と「社会的ルールの認識」の2下位因子、システム化からは、「メカニズムへの関心」、「規則化・法則化への興味」、および「空間の構造化」の3下位因子が抽出された。「共感的気づき」には、いかに他者の立場に立って考えられるかという認知的共感を測定する項目が多く含まれており、かわいそうに思う、自分も同じように苦しくなるといった共感に含まれていない。「社会的ルールの認識」は認識というよりもむしろ行動面での適応・不適応を表しているもののようにも考えられた。

研究I-2(第3章2節)では、共感およびシステム化の機能は、個人内要因である性役割意識と、共感とシステム化の各下位尺度、およびメンタルヘルスとの関連性を

検討した。重回帰分析の結果、男女ともに、性役割意識の「男性性」および「女性性」が共感の「社会的ルールの認識」を促すことは、メンタルヘルスの状態を示す心理的ストレス症状を軽減することが示唆された。また、女性において男性性が高いと、自らの性とは異なる男性性という性役割からシステム化に即した行動が促されるため心理的ストレス症状を高める可能性が示された。これらのことから、共感とシステム化には媒介機能があることが示唆された。

研究II(第4章)では、共感—システムが日常生活ストレスと心理的ストレス症状に及ぼす影響の性差について検討した。共感—システム化モデルには、女性は平均して共感が高く、男性は平均してシステム化が高い傾向にあるという性差が認められている(Baron-Cohen et al., 2018)。本研究では、共感—システム化がストレス要因を介して心理的ストレス症状に性差をもたらすメカニズムを明らかにするためにモデルを想定し検証した。ストレス要因は、大学生が経験する日常生活ストレスを多次元的に捉えた嶋(1999)の「大学生用日常生活ストレス尺度」の中から、大学生にとって主要なストレスである対人ストレス、実存的ストレス、および大学・学業ストレスを使用した。大学生から得られた有効回答(977名分)について多母集団同時分析を行った結果、共感—システム化が日常生活ストレスを媒介して心理的ストレス症状に影響を与えるメカニズムに性差がみられた。男性においては、共感が対人ストレスを媒介して心理的ストレス症状に負の影響を与え、精神的健康を高めた。女性において、システム化が対人ストレスを媒介して心理的ストレス症状に正の影響を与え、精神的健康を低めた。実存的ストレスについては、男女ともに、共感が実存的ストレスを媒介して心理的ストレス症状に負の影響を与え、精神的健康を高めた。さらに、男性では、システム化が実存的ストレスを媒介して心理的ストレス症状に負の影響を与え、精神的健康を高めた。

研究III(第5章)では、加藤(2001)のモデルを参考にして、対人ストレスを負荷したストレスモデルを構築し、認知的評価/コーピングの過程における共感—システム化の機能を検証した。加藤(2001)の対人ストレスモデルは、Lazarus & Folkman(1984)の心理的ストレスモデルに基づいて構築されたもので、対人ストレスだけでなく、パーソナリティ、認知的評価、コーピング、精神的健康といった諸変数間の関連性を明確にした系統的研究を可能にするものである。大学生から得た有効回答(1,090名分)について共分散構造分析を行った結果、共感—システム化が認知的評価に、認知的評価がコーピングに、コーピングが心理的ストレス症状にポジティブあるいはネガティブな影響を与えることが明らかになり、共感—システム化が対人ストレスモデルにおいて機能することが検証された。また、2つをセットにした共感—システム化が、Lazarus & Folkmanの心理的ストレスモデルおよび加藤の対人ストレスモデルで機能することが認められた。

第6章では、本論文のまとめと今後の課題について論じた。本研究で得られた成

果として、大学生のメンタルヘルス問題発生を予防するために、個々の認知スタイルを把握した上で、ネガティブな方向に向かう可能性のある学生には、より適切な問題の解決策を気づかせるように支援し、心理的ストレス症状を軽減できる可能性が示された。このことは、これらの研究をさらに精査して予測妥当性を検討したモデルを構築することによって、実用化される可能性があることが示された。

